

東京病院ニュース

第58号



発行元 独立行政法人 国立病院機構 東京病院
〒204-8585 東京都清瀬市竹丘3-1-1
TEL 042 (491) 2111 FAX 042 (494) 2168
ダイレクト・イン・ダイヤル 042 (491) 4134
ホームページ <http://www.hosp.go.jp/tokyo/>

平成28年7月号に寄せて

国立病院機構東京病院院長 大田 健

今年は関東地方では豪雨のない梅雨になっています。しかし、九州から西日本にかけては、地震の被災地である熊本も含めて豪雨が襲っており、いつものことながら、自然の怖さを実感しています。自然は裏切らない面も我々に示してくれます。今年も東京病院の3カ所の中庭にカルガモの家族がやってきて、みんなの目を楽しませています。雛の成長速度には目を見張るものがありますが、全員で巣立つわけではないので、鑑賞しながらも全部の雛が無事に巣立つ日を迎えることを内心祈ってしまいます。カルガモの季節のあとは、いよいよ体力勝負の夏がやってきます。もう35度を超える猛暑日には驚かなくなりましたが、とにかく最近の気温の上がり方は、10年前には考えられないものでした。我々の生活環境が変化するわけですから、生態に変化が起こること、そしてその病的な表現型である疾患に変化が起きるのは当然だと個人的には受け止めています。したがって、国民の健康を守る医療のあり方も、疾患の変化に対応していくのはごく自然のことだと思います。当院の診療体制にしても、発足当時の療養所としての結核診療から変化して、地域医療の中核病院として急性期医療を担うことが重要な役割になっています。また結核に代わって肺癌の患者さんの割合が最も多くなっており、COPDや喘息、間質性肺疾患、感染症も当院の特長を生かす領域です。消化器、循環器、アレルギー、神経、泌尿器、視覚、運動器、歯科、リハビリテーションなどもニーズの高い領域です。このようなことを踏まえて、病院の舵取りをしておりますが、最近のニュースとしては、本年2月16日付けで地域医療支援病院の承認を受けたこと、また来年1月に東京都がん診療連携協力病院（部位別）の肺癌で申請することです。足かけ3年で緩和ケアも含めて整備が完了し、期は熟したと考えています。さて当院では、春に迎えた新人や転入者も新しい環境に慣れて、各職場の機能が円滑になり、地域医療を担い支援するという重要な役割を果たせる体制が整って参りました。当院の持つ素晴らしい自然と建物、優秀な人材を十分に活用して、北多摩北部医療圏はもとより我が国の医療の充実に貢献できることを願って、昨年同様暑さに負けず全員で頑張る所存です。「自分や自分の家族がかかりたい病院」を念頭に、引き続き運営したいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成28年7月吉日



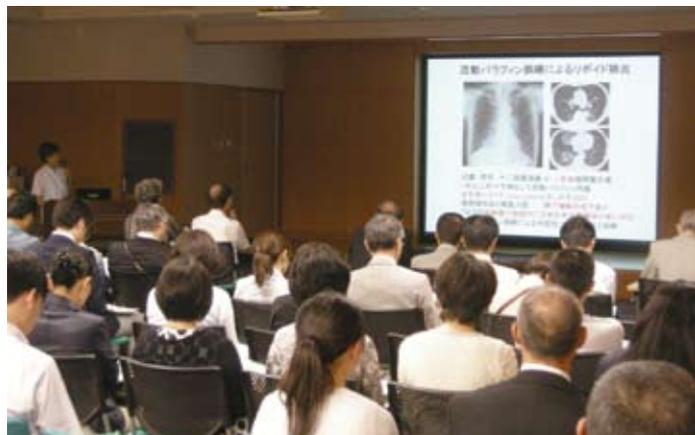
第14回東京病院地域医療連携交流会を開催致しました。

地域医療連携部長 益田 公彦

平成28年6月21日（火）19時30分より当院大会議室にて、第14回東京病院地域医療連携交流会を開催致しました。お忙しい中、150名の先生方・医療スタッフの皆様方にご参加いただき、盛大な会となりましたことを心よりお礼申し上げます。



【瀬口 健至 泌尿器科医長の講演】



【赤川 志のぶ 総センター長の講演】

大田院長の開会の挨拶ではじまり、庄司副院長の座長のもと、「薬剤性肺障害」について赤川志のぶ総センター長より、「夜間頻尿：病因・発症機序と治療について」について瀬口健至泌尿器科医長よりご講演いただきました。やや専門的な内容であったかとは存じますが、先生方の日常診療に少しでもお役立ていただければ幸いです。診療紹介では、消化器センターの診療体制と肝炎治療の最新情報について川村紀夫外来診療部長より、眼科の診療体制について山田秀之医長より紹介させていただきました。最後に、開催に際しご尽力いただいている平野功清瀬市医師会長の閉会のご挨拶で盛会裡に閉会しました。講演会終了後は、当院食堂に場所を移して懇親会を開催し、石橋幸滋東久留米市医師会長の開会のご挨拶ではじまり、奥村秀小平市医師会長の乾杯のご発声、尾崎治夫東京都医師会長にお言葉をいただき、当院から各科診療科長と呼吸器科専修医並びに多職種の職場長から挨拶をさせていただきました。先生方をはじめ多数の方々にご参加いただき、短い時間でしたが楽しく意見交換をすることができ、重ねて感謝申し上げます。

また、地域医療連携交流会に先立ちまして、19時から第6回東京病院地域医療連携推進委員会を開催致しました。北多摩北部2次医療圏の清瀬市、東久留米市、小平市、東村山市、西東京市、および所沢市、朝霞地区の各医師会にご協力いただき、各医師会長の先生方、医師会よりご推薦頂いた先生方、委員の先生方にご参加いただきました。ご指摘いただいた点に関しましては真摯に受けとめ地域医療連携に貢献するように改善してまいります。



【平野 功 清瀬市医師会長の閉会挨拶】



【懇親会】

次回の第15回東京病院地域医療連携交流会は、平成28年11月8日（火）に開催を予定しております。先生方をはじめ多職種の医療スタッフの方々と顔の見える地域医療連携をめざし、より良い地域医療連携交流会となるようスタッフ一同努力して参りますので、次回も多数の方々にご参加いただければ幸いです。

連携医の方を紹介します



金子保谷内科クリニック

院長 金子 有吾 先生

標榜科 内科 呼吸器内科
アレルギー科 漢方内科



院長からの一言：

平成27年10月5日保谷駅北口の練馬区南大泉に金子保谷内科クリニックを開院させていただきました。それまで大学病院では、呼吸器疾患はもとより総合内科専門医として内科全般を診療しており、様々な症状に対して漢方外来をしておりました。

私自身も腰痛をわずらったことがあり、そのことにより患者さんの立場になって考えることの大切さを知りました。同じように世の中にはいろいろな症状で悩んでいる患者さんが多くおられることと思います。そのような患者さんたちの力になろうと考え、患者さんにもっと身近になれるクリニックを開こうと決心いたしました。

呼吸器疾患はもちろん生活習慣病の患者さんたちの治療に今まで培ってきた知識と経験を生かし、分かりやすい説明と治療を提供していきたいと思っております。

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
午前 9:00～12:30	○	○	×	○	○	●	×
午後 15:00～18:30	○	○	×	○	○	×	×

●土曜日 9:00～14:00

《休診日》水曜、日曜・祝日



所在地：〒178-0064

東京都練馬区南大泉5-31-14

連絡先：TEL 03-3921-4159

ホームページ：<http://www.kaneko-hoya.jp/>

当院エキスパート医の紹介

アレルギー科医長 田下 浩之

アレルギー科医長の田下浩之です。2013年から東京病院に勤務しております。研修医時代から長く大田院長の指導の下で、呼吸器・アレルギー疾患の診療を行ってまいりました。現在もアレルギー科となっておりますが実際には肺癌を含めた呼吸器疾患および喘息を中心としたアレルギー疾患の診療を行っています。

東京病院には、呼吸器内科のエキスパートが沢山ありますが、自分が特に力を入れている分野として気管支鏡があります。気管支鏡は胃内視鏡や大腸内視鏡に比べるとマイナーな検査ですが、肺癌の診断には欠かせない検査です。当院は国内でも有数の症例数があり、一昨年度から年間1000件を超えています。また医療機器の分野での内視鏡は進歩の著しい分野でもあります。気管支鏡検査においても、超音波を用いたEBUSという手技が一般的となり、当院でも主に縦隔リンパ節の診断に用いるEBUS-TBNA、末梢の小型病変の診断に有用なEBUSガイドシース法を用いて診断率の向上に日々努力しております。また、気管支鏡検査だけでなく気管支鏡を用いた治療も行っております。悪性腫瘍による気道狭窄に対する焼灼術やステント留置、難治性気胸、有漏性膿胸に対するEWSを用いた気管支充填術、また、自分の専門分野でもあります難治性気管支喘息に対する気管支サーモプラスチック治療も全国に先駆けて実施しており、国内ではトップクラスの症例数を実施しています。喘息については内視鏡治療だけではなく、IgEやIL-5といった新しい抗体治療も積極的に取り入れ、アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法なども行っています。

東京病院は「結核」というイメージがありますが、結核診療だけでなく「呼吸器・アレルギー」の病院と言われるように、最新で最善の医療を提供できるよう努力し、皆様が安心して受診できるような病院を目指していきたいと考えております。

呼吸器内科医長 鈴木 純子

私は公立昭和病院で計5年間、内科の初期研修と呼吸器内科の後期研修をうけたあと、2001年に東京病院に常勤医として就職しました。赴任当初はそれまでは指導医がいつも見守ってくれた環境から、常勤医として1人で責任をもって患者さんを担当するプレッシャーを強く感じたことを覚えています。当院の呼吸器科は経験豊富な、日本のそれぞれの呼吸器領域で活躍されていた先生方が当時多く在籍しており、自分一人では判断を迷う患者さんは、各疾患分野担当の先生に相談し、指導していただきました。そして診療を通して患者さんから多くを教えてもらい今の自分の診療があると、東京病院に赴任して15年が過ぎ感じています。このように長く東京病院に勤務しているため、他院に比較し当院に多い、結核や非結核性抗酸菌症、肺アスペルギルス症の患者さんを経験する機会は多く、院内で若い先生方を指導する場や学会活動ではこれらの疾患について指導、発表等することが多いですが、日常診療では肺がん、間質性肺炎、喘息等、呼吸器全般の患者さんの診療にあたっています。患者さんとなるべくたくさんお話をし、患者さんが不安のないように、信頼してもらえる医師でありたいと日々考えこれまで仕事をしてきました。当院での診療実績をみて遠方から外来受診して下さる難治性の肺アスペルギルス症や非結核性抗酸菌症、一般病院では対応がなかなか難しい結核の患者さんとお話をすると、今後もこれらの疾患領域で当院の果たすべき役割は大きく、日本のトップレベルの診療を引き続き維持できるようにその役割の一端を自分も果たしていきたいと考えています。

地域の先生から患者さんを紹介いただく際の窓口になったり、逆に当院で治療を行った患者さんが退院後安心して過ごせるように、地域の病院や訪問診療・看護、かかりつけの先生方に患者さんを引き継ぐお手伝いをする地域医療連携室という部署が当院にはありますが、今年度より当部署の室長に就任しました。地域の先生方と顔の見える関係作りをしながら、地域医療を担う病院としての役割をしっかりと果たせるように、また当院で治療をうけた患者さんが退院後も安心して過ごせる環境作りをスムーズにできるように、地域医療連携部長をサポートしながら、地域医療連携室のスタッフとともにがんばっていききたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

第4回東京国際呼吸器セミナー

臨床研究部長 松井 弘稔

東京国際呼吸器セミナーは、毎年4月ごろに日本呼吸器学会から招待され来日した、呼吸器内科の分野で著名な先生方をお招きして、東京病院主催で行う講演会です。今年は4月8日からの京都での呼吸器学会直前にあたる、4月6日水曜日に東京駅近くで行いました。例年ですと、講師の先生に清瀬まで出向いていただいて、東京病院内で呼吸器科の先生方との症例検討会も施行していましたが、今年は時間の都合で、都心での講演会のみです。



今年の講師は、米国ネブラスカ大学のステイブレナード先生です。COPD Update - from bench to clinicというタイトルで講演をお願いしました。レナード先生は、COPDの研究から臨床まで幅広く活躍されていて、日本人の医師も数多く、留学生として受け入れて下さっています。当院の庄司副院長も若いころ留学していました。From bench to clinicというのは、研究室にある実験に使う台(Bench)つまり基礎的な実験から、診察室(Clinic)つまり日常臨床の現場までがどうつながっていて、新しい病気のメカニズムの解明などの基礎研究がどうやって薬の開発や患者さんの治療まで結びつくのかを表す表現です。普段はあまり耳にすることのない企業秘密に関するような内容もあります。COPDは薬で元に戻せるような病気ではないという認識ですが、少しでも肺の機能を高めたり有効に活用したりしながら、患者さんに長生きしてもらい、仕事や人生を楽しんでもらうようにするのが、治療の目指すところです。今のところ限られた機能の治療薬しかなく、患者さんとともに、呼吸器内科医としても新薬の開発に期待している分野です。そのあたりの最新の情報が聴けて、有意義な講演会でした。COPD研究の難しさも同時に知ることになりました。

私たちはこういった機会を利用したり、国内や海外の学会に参加したりしながら、東京病院での日常の臨床に生かせるように、新しい情報を取り入れています。個々の患者さんに最適な治療を受けて頂くための情報を得る機会の一つとして、今後もこの会を続けていきます。また、呼吸器内科医以外の先生方や近隣の開業医の先生方にもCOPDなどの呼吸器疾患の最新情報をお伝えする役割も期待されていると思いますので、今後、この会も継続しながら、学会や医学雑誌などで得た情報を還元していくことも継続したいと思います。

平成28年度臨床研究部発表会

臨床研究部長 松井 弘稔

東京病院の臨床研究部には、現在6つの研究室が存在しています。診療しながら研究も行っている医師、基礎研究を中心に自らも研究しながら院生の指導をしている医師、主に基礎研究をしている大学院生や、医師以外の病院スタッフもそれぞれの分野で研究を行って、学会発表をしています。臨床研究部発表会は様々な職種が参加して、研究を通して交流する場です。

今年選ばれた演題は以下の通りです。

1. 生化学研究室 石津 暢隆 Impaired striatal dopamine release in homozygous Vps35 D620N knock-in mice

(homozygous Vps35 D620N knock-in mice では線条体のドーパミン分泌が低下している) 遺伝性パーキンソン病の遺伝子異常から病態解明をめざし、ひいては治療薬の開発のためにも重要な、世界初の研究です。

2. 病態生理研究室 伊藤 郁乃 骨転移を有する肺がん患者のADLに関する調査 骨転移があるとがん患者さんのADLが低下するという、リハビリテーション科の先生らしい目の付け所の、がんとともに生きる患者さんに寄り添った臨床研究です。

3. 看護研究室 森 由紀子 中堅看護師の職務継続支援に向けた職務満足、職務意欲、職務継続意思における関連要因の分析 看護師の離職問題に切り込んだ研究で、200人以上の中堅看護師へのアンケートから、職務継続の要因を綿密な統計処理で明らかにした内容です。

4. 薬理学研究室 小林 宏一 Epithelial-mesenchymal transition promotes reactivity of human lung adenocarcinoma A549 cells to CpG ODN 上皮細胞が間葉系細胞に形質転換すると刺激に対する反応が高まるという内容で、気管支喘息や肺線維症の病態生理解明につながる基礎研究です。

5. 細菌免疫研究室 大島 信治 日本における23価肺炎球菌ワクチン再々接種の免疫原性と安全性

当院で患者さんの協力をいただきながら行った、日本初の研究です。23価肺炎球菌ワクチンを3度目に接種したときの効果と副作用を見たものです。5年毎接種の安全性と有効性が確認されました。

6. 病理疫学研究室 川島 正裕 Bronchial artery embolization to control hemoptysis in patients with Mycobacterium avium complex 当院は世界でも

有数の、気管支動脈塞栓術の経験が豊富な施設です。肺MAC症といわれる慢性肺・気道感染症の血痰、喀血に対して気管支動脈塞栓術の有効性を示した、2015年に発表された世界初の論文です。

つづいて、海外学会のポスター発表の報告会です。今年は、アメリカ胸部疾患学会に2演題出しました。鈴木純子先生の肺アスペルギルス症の発表と、扇谷昌宏先生のCOPDの発表です。

会の最後に院長賞と看護部長賞の発表があり、院長賞は石津先生、看護部長賞は森師長が獲得しました。途中、白熱した議論がありながらも、院内の会らしく和やかに冗談を飛ばす場面もあり、あっという間に、2時間の会が終了しました。仕事の合間に職員が入れ替わり訪れ、多数の方の参加があり、年1回のイベントが終了しました。普段の学会では、自分の専門領域の発表しか聴かないので、分野の違う方の発表はとても新鮮でした。



RST(呼吸サポートチーム)の活動について

国立病院機構東京病院 呼吸サポートチーム

東京病院では、RST(呼吸サポートチーム)の活動を行っております。このRSTは医師・歯科医師・看護師・臨床工学技士・管理栄養士・薬剤師・理学療法士・作業療法士・事務部職員等さまざまな職種で構成されています。主たる活動は人工呼吸器装着中の入院患者さんに対して、治療方針や呼吸状態の確認・検討・援助を行っております。

5月26日(木)には、第43回HOTの会(在宅酸素療法の会)が開催され、RSTからも講師やサポートスタッフとして参加させていただきました。

講演は、松井医師より「お薬以外の治療について」、秋田看護師より、「在宅酸素療法を使用した中でのお出かけ」、川口理学療法士より「呼吸リハビリ～筋力について～」という内容でした。

HOTの会は、各専門職から呼吸器疾患患者さん、ご家族に僅かばかりですが、知見や情報を提供させていただく機会となっております。

今後も、在宅で生活される皆様に少しでも有用な情報提供や、お手伝いが出来ればと思います。



また、RSTでは、当院の医療職を対象とした研修を実施しており、呼吸器疾患に関する知識・技術の習得に努めております。この研修は院外の看護師・メディカルスタッフも参加できるように公開講座になっております。

RSTは今後とも地域医療の発展に少しでも貢献できるよう努めて参ります。

おくすりあれこれ (5)

薬剤部 森 達也

⑤おくすりの保管方法は

おくすりが持つ効果を安全に、そして最大限に引き出すためには、正しいのみ方で飲むことが重要になります。しかし、おくすりの保管の方法が適切でないと正しいのみ方で飲んでも効かないことがあります。そこで今回はおくすりの保管の方法についてお話しします。

おくすりは湿気、光、高い温度に弱いのです。湿気や光に弱いおくすりは包装やおくすりにコーティングをかけるなどで対策が施されていますが、温度は何かで包み込んでも対策にならず、保管するときに特に注意しなければなりません。通常、おくすりは室温保存か冷所保存で保管しますが、室温保存は1～30℃、冷所保存というのは特に規定されていなければ15℃以下で保存します。冷所保存でも冷凍庫に入れてしまうとおくすりによっては変質して効果がなくなるものもあるので、冷所保存は凍結をさけて冷蔵庫に保管しましょう。また、一つの容器から繰り返し使用する目ぐすりや液体のくすりは、菌の繁殖を防ぐために冷所保存でなくとも冷蔵庫に保管した方が安全です。

小さい子供にとっては糖衣錠やシロップ剤はお菓子に見えてしまうため、あやまって口にすることがないように簡単に手がとどくところに置かないようにしましょう。しかし、子供の手がとどかないタンスの上などは、暖房器具の熱が上に上がり意外に高温になっていることがあるので注意が必要です。真夏の車の中は50℃以上になることがありますので、車の中においておくことは厳禁です。台所や洗面所は湿度が高いので避けた方が無難でしょう。また、おくすりを袋から出して保管したために飲み方がわからなくなったり、誤って他の人のおくすりを飲んでしまったなどもあるので、おくすりは袋に入れたまま保管しましょう。たとえ適切に保管していても、おくすりが次のようになっていたら使うことはやめましょう。

- ・おくすりの色やにおいが変わっている。
- ・粉ぐすりが固まっていたり、色やにおいが変わっている。
- ・透明だった目ぐすりや液体のくすりが濁っていたり、底に溜まったものが溶けない。

おくすりの保管は直射日光をさけて湿気が少ない涼しいところに保存するのが良いので、おくすりを袋から出さずに缶の中に入れて冷蔵庫で保管や、缶の中に乾燥剤を入れて家の北側の押し入れに保管がおすすめです。使っているおくすりについてあらかじめ、保管方法についても確認しておくようにしましょう。わからなくなったときには薬剤師に相談してください。

管理栄養士、栄養士とその活動場所について

栄養管理室 主任栄養士 富井 三恵

今回の東京病院ニュースでは、地域連携における管理栄養士の役割を考えるために、「管理栄養士」「栄養士」という職業と、活動場所、「栄養ケア・ステーション」について、ご紹介したいと思います。

●「管理栄養士」「栄養士」の定義

栄養士法（昭和22年12月29日法律第245号）には、このように定められています。

第一条 この法律で**栄養士**とは、**都道府県知事の免許**を受けて、**栄養士の名称を用いて栄養の指導に従事することを業とする者**をいう。

2 この法律で**管理栄養士**とは、**厚生労働大臣の免許**を受けて、**管理栄養士の名称を用いて、傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、個人の身体の状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導並びに特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体の状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うことを業とする者**をいう。

●「管理栄養士」「栄養士」はどこにいるの？

日本栄養士会では、広い範囲の職場で業務を行う管理栄養士、栄養士で、必要な専門性を踏まえた公益目的事業を推進するために、7つの職域事業部を設けています。職域ごとの管理栄養士、栄養士の活動場所は、以下のとおりです。

- ①医療事業部…患者の栄養管理や食事サービス、栄養食事指導などに従事する病院やクリニック、歯科医療、保険薬局などで働く管理栄養士・栄養士で構成。
- ②学校健康教育事業部…小・中学校、特別支援学校、定時制高等学校、学校給食センター（共同調理場）および教育行政機関に勤務する管理栄養士・栄養士で構成。
- ③勤労者支援事業部…企業や大学、矯正施設、自衛隊など、さまざまな形で給食業務を行っている施設の管理栄養士・栄養士で構成。
- ④研究教育事業部…研究機関、大学、企業の研究室で調査や研究、商品の品質管理などを行うほか、大学や専門学校などで管理栄養士・栄養士の養成に従事する管理栄養士・栄養士で構成。
- ⑤公衆衛生事業部…都道府県庁、保健所、市町村などの行政機関に勤務し、健康づくり事業や栄養改善事業に従事する管理栄養士・栄養士で構成。
- ⑥地域活動事業部…開業していたり、フリーで活動している管理栄養士・栄養士で構成。
- ⑦福祉事業部…児童福祉施設、老人福祉施設、社会福祉施設、介護保険施設などの福祉施設に勤務する管理栄養士・栄養士で構成。

●「栄養ケア・ステーション」について ※「栄養ケア・ステーション」は日本栄養士会の登録商標です。

栄養ケア・ステーションは、栄養ケアを提供する地域密着型の拠点です。都道府県栄養士会の栄養ケア・ステーションをはじめ、全国242か所(2015年10月末現在)に設置しています。地域住民の方はもちろん、自治体、健康保険組合、民間企業、医療機関、薬局などを対象に、日々の栄養相談、特定保健指導、セミナー・研修会講師、調理教室の開催など、食に関する幅広いサービスを展開しています。

⇒次号以降で、「栄養ケア・ステーション」について詳細に解説いたします。

【引用】公益社団法人 日本栄養士会ホームページ (<http://www.dietitian.or.jp>)

